

「マザー・テレサ」から学んだこと

（ああ、どうしようかな。）

夏休みも残りあと一週間となった日の午後、私は、宿題の読書感想文を書く本を選ぶために、町立図書館に来ていた。どの本にしようかと悩みながら歩いていると、書棚しょだなにある本の中に、「マザー・テレサ」の名前を見つけた。

（マザー・テレサという名前は聞いたことがある。確か多くの人々を救った女性だよね。この人について書かれた本なら読書感想文を書けるかもしれない。）

軽い気持ちで、彼女に関する本を何冊かもって、いすに座った。そして、パラパラと本をめくった。私は、あるページを見て、思わず手をとめた。

（「死を待つ人の家」って何だろう。マザー・テレサって、多くの人々を救ったんじゃないの。）

この言葉をきっかけに、私は、吸い込まれるように本を読み始めた。読み進めていくうちに、「死を待つ人の家」の意味が少しずつわかってきた。「死を待つ人の家」とは、一九五二年にマザー・テレサにより、インドのカルカタ（現在のコルタカ）に設立された、貧困や病気で死にそうになっている人の最期を看取みとするための施設だった。カルカタでは、家をもたず、道路で横になったまま亡くなる人も少なくなかった。「死を待



つ人の家」に運びこまれた人の中には、溝にはまったまま動かず、体に蛆うじがわいている人もいた。マザー・テレサたちは、このように、もはや手の施ほどこしようもない瀕死ひんしの状態にある人もすべて受け入れた。そして、自分で食事をとることができない人には、食べ物をお口に運んであげたり、起き上がることができない人々の汚れた体をきれいに洗ったり、また、痛みで苦しんでいる人には優しく手を握にぎって励あきらましたりした。

彼女は、「死を待つ人の家」以外にも、ハンセン病※₁で苦しんでいる人たちのための「平和の村」、親に捨てられた子どもたちの世話をする「孤児の家」等こどもを建て、社会の中で弱い立場におかれた人々を助け、愛し続けた。(すごい人だな。もっと彼女について知りたい。)

ふと時間が気になって時計を見ると、図書館の閉館時間が近づいていた。(よし、今手元にある本を全部借りて帰ろう。)

家に帰ると、母は夕食の準備をしながら、

「お帰り。遅かったのね。何をしてきたの。」
と、聞いてきた。

「思わず読書に集中して遅くなっちゃった。マザー・テレサの本をたくさん借りてきたよ。」

「マザー・テレサといえは、ノーベル平和賞をもらった人ね。」
と、母が言った。



「死を待つ人の家」で優しく手を握り、
寄り添うマザー・テレサ

(本当にすごい人なんだ。)

私は、改めて感心し、さらに続きが読みたくなった。

しかし、読み進めていくうちに、私の心にある変化が生まれた。

(マザー・テレサはすごい人だ。こんなに人を愛し、尽くせるなんて。私には到底できない。)

私は複雑な思いをもちながら、次の本を読むと、マザー・テレサが日本に来て発した言葉があった。

「日本人はインドのことよりも、日本で苦しい思いをしている人々への配慮を優先すべきです。」

この言葉を目にした私は、

(そうだ。日本にも、生活に困っていたり、災害で辛い思いをしていたりする人のために力を尽くしている人がたくさんいる。)

という思いがこみ上げてきた。そして、東日本大震災や台風十二号の時に、人々の安全を守ろうと努力した人、復旧のためにボランティアとして参加した人、身近なところでは、私たちの登校を見守ってくれている人の姿が目に見えただ。でも、中学生の私には、まだ何か遠い言葉のように感じた。

(もつと、マザー・テレサがどんなことを話したか知りたい。)

そう思い、さらに読んでいくと、「孤児の家」の壁に書かれた『それでも』という詩があることを知った。その中に、「あなたがしたよい行いは、明日には忘れられます。それでもよい行いをしなさい。」という言葉があった。私は、何となく気持ちがあぐれた。また、何のためによい行いをするのかを、マザー・テレサが語りかけてくれているような気がした。



私が一番悩んだのは、詩の最後に書かれている、「もっている一番よいものを分け与えると、自分はひどい目にあうかもしれない。それでも、一番よいものを分け与えなさい。」という言葉に出会った時だ。

(私がつけている一番よいものを分け与えることで、私のまわりの人が幸せになれる。でも、私がつけている一番よいものとは何だろう。考えれば考えるほど難しい。)

気が付けば、この数日間、読書ばかりしていた。そんな私にマザー・テレサは、ずっしりと重い何かを伝えてくれた。

人々のためにどのように生きるのか、本に書かれていた言葉の一つ一つが、私にとって、これから人生を歩んでいく上で、真剣に考えていかなければならない宿題のように思えた。

※注1 ハンセン病・・・病気が進むと、容姿や手足が変形するなどの後遺症が残った。感染力の非常に弱い「らい菌」が原因であるが、現在は医学の進歩により、有効な治療薬が開発され、ほぼ完全に治すことができる疾患しっかんとなっている。

(参考文献)

- ・『マザー・テレサ語る』ルシンダ・ヴァーディ編・猪熊弘子訳（早川書房）
- ・『マザー・テレサ かぎりない愛の奉仕』沖守弘（くもん出版）
- ・『マザー・テレサ インドから世界へ』西川潤・小林正典（大月書店）

(写真提供)

- ・アフロ